

幼児期からの論理的思考の発達過程に関する研究

大宮明子（著）（2013年1月，風間書房）

十文字学園女子大学人間発達心理学科講師 石田 有理

本書は、幼児期の論理的思考の発達過程について、詳細な実証的研究に基づいて論じたものである。幼児を対象とした（一部児童・成人を含む）11もの心理学実験を行っており、多くの子どもの推論課題への回答という実証的なデータに基づいて、幼児期を通した論理的思考の発達の過程を明らかにしようとしたものだ。特に、幼児期後半においては細かい年齢区分で分析を行っており、発達の变化を丁寧に捉え、児童期以降の発達との関連性も検討されている。

近年、社会が高度に情報化され、グローバル化も進展していることとともに、論理的思考、批判的思考の必要性が大きく叫ばれるようになってきている。教育現場においても、ただ知識を詰め込むだけでなく、その知識を活用し、思考、判断、表現する力を育てることが重要視されるようになってきている。本書でも述べられているが、文部省教育白書（1999）でも、21世紀の社会に必要とされる「生きる力」の一つとして、「自ら考える力」の重要性を指摘している。論理的に考えるためには、複数の事実を自発的に吟味したり、関連づけたりする必要があるが、論理的思考は、まさに「自ら考える力」だといえるだろう。

本書では、幼児の論理的思考を調べるにあたり、「条件推論課題」を用いている。条件推論とは演繹的推論の一つで、if p then q という条件文と、p（肯定式）、not-q（否定式）、q（後件肯定）、not-p（前件否定）という4つの論理式から結論を導く推論である。本書では、特に、解は一つとは限らない「不定」という結論を導く後件肯

定と前件否定（不定推論）に焦点をあてている。不定推論は、大人であっても課題の形式や内容によっては非論理的な結論を導いてしまうことがあり、長期的に発達していく側面だと考えられる。従って、幼児期における条件推論能力の発達を詳細に検討していることは、幼児期のみならずどの年齢においても必要とされる能力に関わるさまざまな要因を明らかにすることにもつながる。本書では、不定推論に関わる認知プロセスを明らかにするために、知識量や知識の種類によって課題成績が異なるかどうかを検討しており、知識が論理的思考にどのように活用されるのかについて重要な示唆を与えるものである。また、誤答にとまらう理由づけの分析や、複数の教授実験から、幼児がどのように考えているのか、論理的思考を行うためには「何が」必要なかを明らかにしている。

本書に示された研究結果から、幼児にとって不定推論を行うことは難しいことがわかる一方で、詳細な検討により、幼児が自発的に他の可能性を探り、解は一つとは限らないという結論を導こうとする姿が浮かび上がってくる。また、それは、幼児が大人に比べれば未熟で不十分であろう自らの知識を最大限利用して、目の前の課題を解決しようとする姿でもあり、まさに「自ら考える力」のあらわれであろう。重ねて、本書では「自分だったら」という視点変化や、他の可能性を探る構え、自分自身の認知プロセスを意識化させるようなフィードバックが、幼児の論理的な思考を促すことを明らかにしている。年々、論理的思考が重要視される社会において、自ら遊び学んでい

く幼児期にこそ、論理的思考の大切な萌芽がある 示唆に富むものであろう。
ことを強く感じさせる本書は、多くの人にとって